

ポケモンガチャはじめ
ました

バウ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

え？転生ですか？

ほー、ポケットモンスターの世界ですか。あ、特典貰えるんですね？

じゃあポケスペのゴールドの才能を下さい。あと好きに出来る島と金。

あ、やりたい事バレました？

神様もイケる口ですねぇ：なら、システムメニューで管理できますか？

「さあ、いらつしやい。今日は伝説のポケモンが当たるポケガチャだよお！」

※唐突に思い付いただけなので、多分続かない。

※2コラボのルール

始めにコラボがしたい旨を感想orメッセージで伝える。

自分の作品で使いたいだけか、互いにコラボ回を入れたいのかはその時に言う。

※互いは作品と作者の気力次第です。

※3ポケモンガチャのルール

乱数メーカー(<http://mpnets.net/brand/>)を使って1から現存するポケモン図鑑の最後の数字を入力する。

※別の抽選ソフトでも可。※2抽選する回数は、ガチャの引いた回数です。

その数字をポケモン図鑑(<https://pentekororopokemon.com/zukan/>)の物と当て嵌めましょう。

進化後のポケモンが出た時は、ゲームのタマゴと同じように進化前の子が生まれま
す。

※作品上、伝説が出し難い方は引き直しも可

目次

転生特典はポケスペで	1
ポイントを稼いで開店準備	5
いらつしやいませ、ご注文はポケモンで すか？	9
ポケモン博士	15
ガチャは沼、はつきり分かんかね	21
ポケモン海上保安庁	25
ポケモン試験	33
サカキ、ジムリーダーに就任する	42
ポケットモンスターロスト	49
ニヤースでニヤース！	52
ポケパーク資料1 10話までの施設 (1-1話後の様子) ◆コラボ希望の方、必 見◆	57
タイプ一致なんだなあ…ハルオ	65
マグマ団VSアクア団	70
ポケモンコロシウム『初心』大会	74
ミステリーの香り	82
純白のフルール・ド・リス	86
サカキ様 ロケット団を立ち上げるつて よ	93

転生特典はポケスぺで

「はー、ここがポケモンの世界かあ」

転生した俺は、一人小屋の中で呟いた。

「ま、特典も貰ったことだし、何とかなるだろ…」

まずは貰った特典の確認をしようと思う。

俺の貰った特典は、全部で三つ。一つはポケスぺのゴールドが持つ才能で『孵す者』だ。これは自分の手で孵った卵から生まれたポケモンの潜在能力が、最大の状態で生まれて来る才能だ。つまり手で生まれたポケモンは、全て6Vで全ステータスの基礎値なども最大で生まれて来るのだ。完全にチートである。

二つ目は、現在俺がいるこの島の所有権だ。これは単純に土地を持っていると思ってもらえれば良いだろう。と言ってもこの島には野生のポケモンは生息していないので、モンスターボールを投げてゲットするポケモンはいない。ポケモンの世界に新しく島を創った弊害である。

三つ目は、目玉のシステムメニューだ。これは俺の環境全てを管理する機能で、手持ちのポケモンや島の設備。食品の購入など俺にとってのライフラインである。

「早速メニューを使うか」

システムメニュー

・ポケモン

・島設備

・商品購入

・商品売却

「商品購入…あった『ポケモンのタマゴ』」

ポケモンの世界では、ポケモンの購買は合法だ。ゲームではコイキングを売っていたり、ゲームコーナーの景品になっていたりする。

「ヒトカゲのタマゴって」

最初のポケモンは、御三家と決まっている。それ以外は邪道だ。あ、イーブイは許す。それは兎も角として、ここは島なので移動手段が必要なのだ。

テレポート？行つた事のない場所に飛べるわけじゃないじゃん。

「うっし、生まれるまでは一人暮らしたな。準備するか」

続々と独り暮らしに必要な生活用具を買い込んで行く。

ちなみに設備投資や商品購入はポイントを消費している。このポイントは、島の中でポケモンバトルをする事で獲得することが出来る。その他にもポイントを持つ人物か

ら受け取ることが出来る。

此処まで来れば俺のやりたい事を察して貰えるだろうか。

そうこの島を使って、一大商業施設を作り上げる事だ。

とは言え最初は小さい店（小屋）を拠点に、地道に規模を大きくしていくしかないのだが、客も戦うポケモンもいないのでポイントが減るばかりだ。

「ランダムタマゴを購入」

メニューはポイントさえあれば何でも買うことが出来る。ヒトカゲのタマゴは、一個5000ポイント（初期ポイントの半分）もしたが、中身の分からない処分品の様なタマゴは一個500ポイントとローコストである。

この処分品とは、ポケモン保護区に放置されたタマゴや、野生のポケモンが産み落とされて、そのまま捨てられたタマゴなどである。ポケモンは繁殖力が高い反面、自分の元で育てる種類はとて少ない。

「数は五個で良いとして…設備、ポケモンコロシウムを建築だ」

手持ちのポケモン同士を戦い合わせれば、ポイントも入るしレベルも上がる。正に一石二鳥。

ただポケモンコロシウムを建てる為に、手持ちのポイントは全て使ってしまった。

ポケモンコロシウムLv1

ポケモンバトル大会『初心』Lv1〜10のみ

建てただけなのでポイントの消費は少なくて済んだが、性能は低い。

特別な使い方としては、初心者トレーナー用のバトル大会が開催できる様になっただけだ。

それでも手持ち同士のバトルをさせる分には問題ないので、今はこれで良しとする。
三日後に生まれたポケモン達は、とても愛おしく感じた。

ポイントを稼いで開店準備

俺の購入するタマゴにはある特徴がある。それは、全てのポケモンのタマゴを購入できるといふ物だ。

つまりは伝説のポケモンもタマゴから生まれる訳だ。

「…」

「ビク…ティ?」

(鳴き声分からないポケモンが多数いるので、名前を上手く鳴き声っぽく使っています)

「まさかランダムタマゴで伝説が出るとは…ビクティニ道場はしないけども」

他のポケモン達はヒトカゲ×2、ゴース、ポツチャマ、ヒノアラシである。ランダムでヒトカゲが出るならつと思わなくも無いが、実は一体は色違いである為何の問題も無い。

「カゲエ…」

「カゲ?」

「(おおおお」

「ヒノ！」

「ポツチャ〜」

ヤバイ、家の子可愛い。

「ほら、ポケマメだぞ〜」

ポケマメは単価が安い上に、数个食べさせればカビゴンでも満腹になる優れ物だ。本当は虹マメが欲しいのだけれど、特別なポケマメは物凄く高い。

「みんな食べたら、コロシウムに行つてバトルしような？」

声を掛けるものの良く分かつてなさそうなポケモン達。生まれて直ぐに戦わせるのは、気分が良くないがポイントがカツカツなのである。

まあ、生まれて直ぐにラスボスと戦わされたピチューよりはマシだろう。

「カゲ！」

「ノーコー！」

現在ポケモンコロシウムでは、色違いヒトカゲとヒノアラシの泥仕合が行われている。

言い忘れていたが、この島では買い物だけでは無くポケモンを回復させるのにもポイントを消費する。RPGの宿屋をイメージするといいだろうか。

そんな訳でポケモンたちのレベルが順調に上がっているのは良いのだが、回復させる

のと水分補給やポケマメ代で、収支がプラスとマイナスを行ったり来たりしている。

「ビクティニさんは、経験値もポイントも美味しいが…」

腐つても伝説に連なるポケモンだからか、ポイントの収入が一番多い。無論、経験値とポイントはビクティニを倒した時に得られるものなので、連戦を強いるのも可哀そうだ。

「全員レベルが上がっているし、進化するまで我慢かな。進化後ならポイントも増えるだろうし」

ポケモンがリアルに生きているこの世界では、自然治癒も可能なのだがつい回復させてしまう。

ゲームの癖だろうか？

一先ずコロシアムを切り上げて、店に戻る。

「お前らはゆつくり休んでて良いからなく」

休憩をあげないと疲労が溜まる一方なので、きちんと休んでもらう。彼らが休んでいる間は、俺が仕事をやる時間だ。

何て言ってみたが、準備にはポイントが必要なので、今できるのは店の名前を考える事ぐらいだ。

「ポケモンで店って言ったらフレンドリーショップだけど、大手チェーンだしなあ」

フレンドリーショップは、大手コンビニチェーンの様に全国展開している。他の個人販売店を潰しまくっている。ボール職人のガンテツなどは、ボールの製造方法を盗まれ廃業。今はぼんぐりを育成して、ボール工場に卸しているそうだ。

「う〜ん……ポケモン、ポケ…ポケポン。ガチャ専門店じゃないし…フレンドリーショップは、ポケモン関係ないネーミングだよな。……ビクティニ。うん、決めた」

決まった店の名前は『ビクトリーショップ』だ。勝利の為のアイテム。あなたの勝利への努力を支えるビクトリーショップ。

近日開店！

いらっしゃいませ、ご注文はポケモンですか？

手持ちのポケモンたちが進化しました。

リザードやらゴースト、マグマラシになりました。

お陰で入って来るポイントが倍以上に増え、晴れてビクトリーショップの開店と相成りました。

商品のラインナップは独特な物が数多くあり、何と言っても他にはないポケモンのタマゴを購入できるポケガチャが、この店の目玉商品だ。

ポケガチャは複数の種類を考えているのだが、今は仕入れのポイントが足りない為に、商品購入のランダムタマゴを用いた一種類だけだ。

このガチャは、一回1000ポイントで引く事が出来る。

仕組みは普通のガシャポンやガシャコロとほぼ同じで、お金の代わりにポイントを支払うと取っ手を回せるようになり、排出口からモンスターボールが出て来るのだ。このモンスターボールの中にタマゴが入っている訳だ。

ポケモン世界ではモンスターボールに入ったままのタマゴは孵化せず、タマゴのまま数日をトレーナーと過ごす必要がある。その為、ガチャの中で孵化しないのだ。

「まあ宣伝もしてない、ほぼ無人島な島にそうそう客が来る訳無いか…」

もし客がこの店を訪れてもポイントを持っていないので、購入する事は出来ないのだが、本人は気が付いていない。

「ふわあ、みんな今日もコロシウムに行くのか？」

この島には他に娯楽がない所為か、いつの間にか家のポケモンたちはバトルが好きになっっていた。

「怪我しない様にな。水分取るんだぞ」

忘れてはいけないのは、俺はトレーナーでは無く経営者だと言う点だ。ポケモンを所有しているからトレーナーではあるのだろうが、ポケモンを鍛える様な事はしていないので厳密にはトレーナーとは言い難い。

だからか俺のポケモンは、自分を自分たちで鍛えている。さながら野生のポケモンの様だが、忘れてはいけないチート孵化したポケモン達なのである。レベルを上げるだけで、大抵の相手は手も足も出ない。問題は技の使い様なのだが、俺も余り詳しくないでトントンだ。

「メニユー制のアイテムは、劣化しないのがセールスポイントだな」

今日も平和な一日だな。

！

「こんな所に店…？」

ジムリーダーを目指して、ポケモン修行の旅に出て数日。移動用のピジョットで空を飛び回っていたら、そこそこ大きな島を見つけた。

休憩も兼ねて上陸した所、どうも野生のポケモンが見当たらない。草むらや森の中どころか周辺の海にも野生ポケモンが見当たらない。

「奇妙な島だ…」

興味が湧いて辺りを探索していると、ポケモリーグの会場の様なドームを見つけた。中を覗こうとしたが、入ることが出来なかった。

サイドンのドリルでも穴が開かないドームの壁、もしかしたら研究所なのかもな。ドームの中からは、ポケモンが技を発している音が響いている。

「炎タイプの技が多い様だが、指示をする声が聞こえない…。トレーナーは不在か？」
さらに探索を続けると、看板を掲げた小さな家を発見した。

「こんな所に店…？」

看板には『貴方の勝利への努力を支える ビクトリーシヨップ』と書かれている。聞いた事のない店名だが、個人経営の店は全国的に珍しい物ではない。だが無人島に店とは、興味を引かれる。

「邪魔するぞ」

「あ、ヒイらっしやいませ!」

ふ、滅多にこない客が来たんで驚いているのか?

!?

「邪魔するぞ」

「あ、ヒイらっしやいませ!」

アレー、サカキだ? ロケット団のボスが初めてのお客さん!

「お前が店長か?」

「はい、そうです」

「この島は何だ?」

おお。ド直球。

「この島は私が所有する島でして、名前は」

「名前は?」

あー、島の名前決めてなかった!?

「ええつと…『オレノ島』です」

「『オレノ島』…変わった名前だな」

「…」

セーフ!

まあ、元の世界の島にも父島やら、婿島なんかがあったから意外と何でも行けそうではある。

「まあ良い。何でこの島には野生のポケモンがない？」

「オレノ島は最近完成した人工島なので、野生のポケモンは警戒して近づかないんです」「人工島…なるほどな。しかし、何の為にこんな島を？」

「ああ、それはこの島全部を使ったポケモンテーマパークを作ろうと思っていましたね」

「テーマパーク!?!」

「今は元手が無くて、小さな店とコロシウムしかありませんがね」

その為には、ポイントを多く稼がなくてはいけない。次は島へのアクセスを増やす港やエアポートを作る予定だ。

「なかなか実現させるのが難しそうな夢だな。俺もジムリーダーなんて馬鹿な夢を持つ男だ。応援するぞ」

綺麗なサカキ様マジ紳士。

「では此方をお持ちください」

俺はサカキにポイントカードを渡した！

「この島では物を買うのにも、ポケモンを回復させるのにもポイントを使います。このカードを持ってポケモンバトルをするとポイントが溜まりますので、ここでは財布の様

な物ですね」

「ふふふ、つまり俺は今無一文という事とか」

「現金をポイントに変換する事も出来ませんが、それはトレーナー以外の話ですから」

「いや、良い。トレーナーならば、バトルで稼がねばな」

今は施設が無いからアレだけど、いずれはポイント雇用アリだな。どう考えても人手が足りん。

「そう言えばあのドームだが」

「ああ、あれですか」

ポケモンコロシアムの説明をするとサカキは喜び勇んで、コロシウムの方に駆けて行った。

「今の所、バトルできるのはコロシウムの中だけだからなあ」

バトルの出来る施設を他にも作るべきだな。

その日はサカキがボロボロになって帰って来た。

お前らまた進化したんか!?

ポケモン博士

サカキが島に来るようになって、手に入るポイントが増えた。サカキとの対戦で発生するポイントよりも、ボロボロになったサカキのポケモンを回復させる方が稼ぎになっている不思議。

「んー、今の手持ちだと伸び悩みだな。店長何か良い案ないか？」

「案ですか？」

「今の手持ちは、サイドン、ニドキング、ニドクインが確定メンバーなんだが、限界を感じててな。何か新しいポケモンを加えようかと思ってるな」

「やっぱり、じめんタイプですか？」

「そうだなあ、ジムリーダーはタイプの固定が義務付けられている。だから一タイプを極めるスタイルになる」

「なら、ゴローニャとかダグトリオ。その地方のポケモンじゃないとダメなんだったか？」

ポケモンのタイプを固定されるジムでは、それだけでも使える種類が限られる。だがジムリーダーは、その地方の広告塔でもある。その為ジム戦に使用するポケモンは、そ

のポケモンジムが配置されている地方のポケモンを使用する様に、ポケモンリーグから命令されたりする。

「いや、最近は緩くなっているからな。一体程度なら、別の地方のポケモンでも問題ない」

「じゃあ、タイプを複数持つてる奴かな。ミズ／じめんのナマズンとか、エスパー持ちのネンドール」

「エスパーか…悪くないが俺には向かんな」

実直剛健な性質を持つサカキには、確かにエスパータイプは似合わない気がする。ミュウツは、制御装置が有ったから扱えていたのだろう。アローラの奴は、並行世界のサカキだろうし。

「あ、ガブリアスなんてどうです?」

「確かドラゴンタイプだったな…試してみるか」

「タマゴ高いですよ」

「幾らだ?」

「十万ぐらいかな…」

「ム」

これは販売価格では無く、商品の原価である。ランダムタマゴで数を引く方が、まだ

安くなりそうな値段だ。

「店売りか？」

「原価だ」

「むう」

サカキとは随分と軽口を叩き合う仲になった。最初の頃はラスボスかと思つて警戒していたんだけど、まだロケット団どころかジムリーダーになる前と知り、なんとか落ち着きを取り戻した。

ジムリーダーは毎日の様にジム戦を挑むトレーナーの相手をする為、体力のある若くて優秀なトレーナーを選出する事が多いらしい。サカキは今年で29になるベテラントレーナーだから、ジムリーダーになりたいと言うと笑われることも有るらしい。

「助かった〜！」

「!？」

サカキからジムリーダーについてのレクチャーを受けていると、太めの男性が汗だくで店に飛び込んで来た。マスコット兼、用心棒のビクティニさんが驚いて目を覚ました。

「み、みず」

「ミミズ？」

「店長、ボケている場合ではない様だぞ」

「ティ…」

ビクティニさんにも呆れられたので、大人しくペットボトル入りのおいしいみずを渡してやった。

「ふっ、ハア〜」

「ビイクティ！」

「開店以来初の二人目の客だな」

「これまで、私以外にいなかったのか…」

「落ち着きました。助けていた দিয়ে、ありがとうございます！」

「おいしいみずお一つで、3ポイントになります」

「ポイント!？」

この男は最近博士号を取得したポケモン研究者で、趣味のフィールドワークをしている最中、ギャラドスのたつまきで遭難したらしい。

「3ポイント」

「だから、ポイントって言われても…」

「フン、現金で良いじゃねえか…前にトレーナー以外があると云っていただろう」

「ポイントの購入だと…1ポイント70円ぐらいだな」

「ぐらい?」

「物価変動とかで、相場が変わるんだよ」

「ああ、ポケドルみたいなもんか。そら面倒な計算だわな」

「とりあえず、ポイントカードな」

「あ、どうも」

丁度良い機会だし、新しい設備を導入するのも良いだろう。

「何だあ、それは」

「これはポイントチャージ機だ。これで好きな金額をポイントに変換できる」

「便利だな」

「一応、サカキのポイントカードでも使えるぞ」

「何!?!」

「二人に渡してあるのは、仮発行のポイントカードだからな。本発行のカードは、トレーナーカードを差し込む機械だから」

「それはカードなのか?」

「あ、トレーナーカードがポイントカードになるんですね」

「そうだ。トレーナーカードには、本人識別のチップが埋め込まれてるからな。機械がそれを読み取って、個人別のポイントを掲示できるつ訳だ」

「その機械が壊れたら？」

「新しいの付ければ良いだろ、機械の機能は読み取りと支払いだけだ」

「仮カードって何の意味があるんですかね？」

「プリペイドカードだと思っただけ良いぞ。人にポイントを上げたり出来る。ポイント
をチャージ機を通してチャージ出来る上に、誰でも使えるお手軽仕様だ」

「バトルチャージ機能は、どういう仕組みなんだ？」

「島の地下に情報統制室があつて、独自にポイントを送ってる。本カードだとそのまま
受信するが、仮カードだと施設を利用する時にポイントが入るぞ」

「ポケモンバトルで得られるポイントの割り振りは？」

「独自判断って言っただろ。詳しくは知らないが、対戦相手の強さ次第で変化する」

こうして太い博士から3ポイントを回収する事に成功する。

「帰りはサカキに送って貰え、そらをとぶかなみのりが無いと島を出られん」

「サカキだ。ジムリーダーを目指している」

「あ、ボクはポケモン行動生物学博士のおダマキと言います。よろしくお願いします」

ガチャは沼、はつきり分かんかね

「うぐぐ…」

「むぬぬ」

「いい加減、研究室に帰ったらどうです。オーキド博士、ウツギ博士」

オダマキ博士が自宅に帰った翌日。パソコンで研究者仲間にオレノ島の宣伝をしたらしく、暇人代表のウツギ博士がポケモン界の権威オーキド博士を伴ってやって来た。

ポケモンとの新しい関わり方を期待してやって来たようだが、ここにあるのはコロシアム位である。

さぞガツカリしているだろうと思っていたら、目敏いウツギがポケガチャを見つけた。例のランダムタマゴが入ったモンスターボールが詰まったガチャである。説明を求められたので懇切丁寧に説明した所、三日間ずっとガチャを回している。

「ほ、ポケモンのタマゴが一杯！」

「ポケモンの売買は禁止されておらんが、ワシは苦々しく思っていた。だが生まれる前のタマゴの状態なら、ポケモンに余計なストレスを与える事も無い…これは革命じゃ！」

「分かったから帰れ」

「後、十回だけえ……!」

「お前ら幾ら注ぎ込む気だよ。十万か百万か?」

「三千万位かのう?」

「ははは、生活費もつつこめ〜」

「研究費でタマゴ買うのは分かるが、生活費はダメだろ」

とは言えポイントが大量に入ったので、施設を増設できる。新しい設備をポイントで購入すると完成品が召喚される。その為、人がいる現状では不自然な施設増加は避けられた方が無難だろう。

それでも、既に出来上がっている施設をアップグレードするのは問題ない。という訳でポケモンコロシウムを最大まで強化し、大会『初心』『中堅』『中堅』『中堅』『中堅』『中堅』『中堅』『中堅』『中堅』『中堅』『中堅』『中堅』『中堅』『中堅』『中堅』『中堅』『中堅』『中堅』『中堅』『中堅』を開けるようになった。序にポケモンリーグでお馴染みの環境変更機能が追加された。

博士たちは船で島に乗り込んで来たので、港も使いで発注だ。俺の趣味で、釣り橋も設置して於く。博士たちは三日も店で粘っていたので、そこまで違和感は無いだろう。ポケモンを使った工事は、意外と速く済むの物だ。

「そうじゃな……孫の生活を脅かす訳にはいかん」

「お孫さんですか?」

「うむ、初孫での」

「たしか、今6歳でしたっけ？」

「そうじゃ、いやー孫がこんなに可愛いもんじゃとは思ってもよらなんだ」

「じゃあ、そのお孫さんに早く顔を見せに帰ってあげてください」

孫つて多分ナナミさんだな。ゲームでタウンマップをくれるお姉さん。まあ、俺がタウンマップの存在に気が付いたのは、ゲーム四週目ぐらいだった。ポケモンのストーリーが気になったのはポケスペを読んでからだし、ライバルのセリフとか全く興味なかった。って言うか、ポケモンつてストーリーあったのな。

「およそ300個のタマゴですか…これは研究のし甲斐がありますね！」

「そうじゃのう。世界初のポケモンタマゴじゃ」

「初？」

「学術的に初じゃな。報告例は数多くあるが、検証と確認はされておらん」

「一般には認識されているのに空しい話です」

「民間療法みたいなもんか」

「うむ。ガルーラやビークインの様な、生態が良く分かってないポケモンも多いんじゃ」

「ほー」

「まあ、全てのポケモンがタマゴから生まれるという説もあるのがの」

(伝説系は生まれないんだけど……うちのタマゴが説を立証しそうだな)

「僕は信じていますよ。ポケモンには色違いと言う遺伝子変異したポケモンがいます。突然変異で、一代限りのポケモンが生まれても不思議ではありません!」

「まあ、ワシもホウオウ、ファイヤー、サンダー、フリーザーは元々同じポケモンじゃないかと考えた事がある」

「え?」

「この4匹は姿が良く似ている。元々はポツポだったのではないかのう」

「えええ!?!」

「他にもルギアは、ラプラスの変異体と言う説があつて……」

ポケモンの研究って、結構たのしそうだなあ。

ポケモン海上保安庁

！

「休み…だと!?!」

!?

「そうですね。やはり今の状態ですと、定期便の許可を得るのは無理でしょう」

「そうですか…」

ハロー、店長だ。今日はポケパーク開園の第一歩として、定期便を作ろうとポケモン海上保安庁にやって来たんだ。

「流石にこの内容ですと、宿泊施設が無いのは…」

「あー、なるほど」

「ポケモンセンターなら宿泊、食事処を完備した上に、無料で建築できますが？」

「論外、却下」

「…」

ポケモンセンターとか全国支配を目論む施設だと思う。奴ら何の権利があつて、人のポケモン管理してやがるんだろう。調べて見たら、フレンドリーショップと同じ系列な

んだよな。

「ま、しようがない。客には自力で来てもらおう」

港も出来たし、船で旅行に来る客も出て来るだろう。何なら船を買って、予約制の送迎でも良い訳だ。

「宿泊施設…ホテル？いや、腰を据えて生活する人も出て来るだろうし、貸別荘の方が良いか。いつそ町でも作るか…回復装置は買えばいいとして、食事と連絡用の電波塔…テレビとラジオも欲しいな」

「…あのー」

「そうなるも最低でもラジオとレストランには人を雇わないと…」

「おーい」

「人が増えれば治安が悪くなるのが、世の習い。一応、俺のポケモンは警備用に育ててるけど警備トレーナーも必要か…」

「おいつてば？」

「うっさいわ、ハゲエ！」

「ハゲじゃねえよ!!」

何だいきなり？

「一体、何だお前？」

「なんだかんだと聞かれたら、答えてやるのがマイポリシー！ 当てもなく一人さまよう孤高のトレーナー、コジロウ！」

「…」

またロケット団かあ…。

「む、やはりこの名乗り方は、今一步物足りない…」

「相方がいないからだろ」

「その発想は無かった！」

「で、何か用か？」

「人手が足りないと言っていただろう。オレを雇ってくれ！」

「いいぞ」

「まあ、いきなり言われても困るだろうが…何!？」

「基本住み込みだし、島に骨を埋める事になるかもしれないが…」

「不吉!？」

「…ポケモンバトルだけ出来れば、飢える事無く生活できる島だ。俺に雇われれば、もっと裕福な生活も出来る。豪華絢爛な生活ができるかは、お前次第だけだな」

「いや、オレの家は元々裕福で、贅沢な暮らしの息苦しきは良く知ってる」

「そうか…」

「でも良く知らない、オレでも良いのか？」

俺はコジロウの事を知っている。アニメで個別シナリオを幾つか見た事が有るからだ。ただコジロウからしたら、不安だよな。

「オレ、トレーナーズスクールの受験にも落ちてるし…」

「ああ、あんな馬鹿育成機関は行かない方が良いぞ。教えてる内容は古いし、間違いが多い」

「えええ!?」

「炎タイプが水タイプに弱いとか嘘だから」

「でも火は水で消える…」

「同じレベル台で不利に働くってだけだ。高温の熱は裕に水を蒸発させるだろう？」

「でも不利なんじゃ？」

「戦況が不利な事は、敗北が確定する事じゃない。ましてや不利なのは弱い事じゃない」

「でも相性は…あ」

「分かっただろ？馬鹿育成機関だって」

「トレーナーズスクールで学んだ子供たちは、相性の良いポケモンを使えば必ず勝てると思う…でも、そもそもそれが間違い」

「有利に戦える事は事実だが、ポケモンが強くなる訳じゃない。回避の無い殴り合いな

ら、強弱を語れるだろうがな。あの馬鹿育成機関は、多くの生徒を指導する為に手早く説明する。子供は純粋だから、教わったまま覚えて…」

「……トレーナーになる」

「全員とは言わないがな。ちゃんと自分で考える子供もいる」

「なるほど…」

「オーキド博士なんかはそれを嫌って、自宅はスクールの無い場所を条件の一つとしたらしい」

最初から何かを学ぶのに、手早く済ませるなど無理な話なのだ。なにしろ常識が間違っていたと簡単に覆るのが化学の世界である。

生物学に関してはもっと単純に情報が塗り替わる。生き物が相手だから、性格、環境が違うだけで細かく生態が分岐する。

「なるほど…」

「それは兎も角、家が裕福なら家族の説得とか大丈夫なのか？」

「イ、いやあ…そのー」

「ウチは観光地になる。どうせ顔バレするんだから、ちゃんと話し合ってこい」

「うう…はい」

「今は人手が全然足りないから、心配そうにしてる後ろの奴らも纏めて面倒見てやる」

「え、後ろ？」

コジロウが振り返ると、そこには自身が所属しているチャリンコ暴走族のメンバーが扉の外に集まっている。

「ね、みんなあ…」

「あの悪人面は、警備員に有用だな…」

こうして100人ほどの暴走族を丸ごと雇った。

オーキドのガチャ沼と後から連絡して来たコジロウの両親の資金援助で、一気に島の開発が進んだ。

コジロウの両親は、音信不通の息子が見つかった事を喜び。そこまで追い詰めていた自分たちを責めて、婚約も解消したらしい。幸いコジロウが家を出てから、寂しくなったご婦人が第二子を去年出産していたらしく、後継者問題は先送りになった。

後を継ぐかはコジロウと弟のコダチの意思に委ねる方針だそうだ。

「ラジオは受信設備で済んだな…コジロウ！」

「何ですオーナー？」

「お前、ムサシと二人でテレビスタッフやれ」

「二人でですか!？」

「マスコットのポケモン入れて二人と一匹かな。つてか撮影班な」

「あ、それなら」

「まあ、テレビ局スタッフが入るまで二人で回して」

「無茶ぶりい!」

!?!

「えーつとチャリンコ暴走族の君たちには悪いけどチャリは降りてもらう」

「「なっ!」」

「島だから地面の起伏が多い。せめてマウンテンバイクに乗ってくれ」

「「憧れのマウンテンバイク!」」

!?!?

「ポイントカードは貰ったな。トレーナーカードを指し込め」

「「うす!」」

「これからポケモンバトルだ。弱い警備員など監視カメラにも劣る」

「「うっす!!」」

「「…」」

「ポケモン持ってない奴がいるな?」

「「…おっす」」

「お前たちは別メニューの訓練だ」

「?」

「一人一個ポケモンのタマゴをやるから、孵化させて育てろ」

「「おおお！」」

「んで、試験に受かったら育てたポケモンはお前たちの相棒。試験に落ちたら、解雇だ」

「!?!」

「良いか?この試験は個別に行うし、定員も定めてない。もっと言えば、生まれたばかりの子供でも受かる試験だ。…一っだけヒントをやろう。この試験に落ちる奴は、非常に高い確率で犯罪者になる」

「:...」

(不安になる奴なら、問題ないだろうがな)

!?!?!?

三日後。

「これから試験を始める」

「うっすー！」

「番号順にポケモンと部屋に入る様に」

さて、ジツクリ拝見しますか…。

ポケモン試験

はあ、私ムサシ。

普通に過ごしていると男が鬱陶しくて、チャリンコ暴走族に所属していた。話が飛んでいる様に思うだろうけど、その実態がついている。奇抜な髪形をすれば、言い寄られたり襲われることは無い。チャリンコ暴走族に入っていれば、何かあっても仲間が助けてくれる。

状況が変わったのは『補助輪のコジロウ』が、無謀にも飛び込みバイトを探して補助輪自転車で駆け回り始めた事だった。

コジロウは暴走族に似つかわしく無い優しい性格だ。チャリンコ暴走族の資金が底を着くのを知り、少しでも資金を得ようと行動を起こしたのだろう。なんかかんだ有つて、チャリンコ暴走族全員が雇われることになって、私も一緒に付いてきた。

オーナーは、名前を名乗らない。だから私たちは、オーナーや店長と呼ぶ。

オーナーは私に髪を下ろす様に言った。私は事情を話したが、客商売で威圧してどうすると正論を言われてしまった。

「そんなに嫌か？」

「その…怖いんですよ。いつも運よく助けられますけど、次に襲われたら…っつて」
「うーん」

「私、ポケモンも持ってないですし…スクールも受験失敗で」

ポケモンを持てるのはトレーナーだけ。ブリーダーやジムリーダーは、その延長線だ。トレーナーズスクールは、トレーナー資格を得る一般的な施設だ。一部のエリートトレーナーは、ジムリーダーはから特別に許可を受けている。その他、研究所に認められた研究者直属のトレーナーは、ポケモン凶鑑を資格として与えられる。

トレーナー資格がなくてもポケモンをゲットする事は出来る。その代わりポケモンセンターやジムを利用する事が出来ず、もしポケモンを力づくで奪い取られたとしても警察は動いてくれない。自分のポケモンだと証明できないからだ。

「スクールがどうかしたのか？」

「トレーナー、資格が…その無くて」

「ああ、トレーナーカードが無いのか…身分証がないと困るよなあ」

「あの…」

「まあ、ウチで発行するか…」

「発行できるんですか!？」

「この島は、周辺の海域を含めて俺の持ち物だからな。小さいけど一個の国みたいなも

んだ」

オーナーはポケモンを持っていない私に、都市伝説で有名なポケモンのタマゴを手渡して試験をしよう。

産まれたばかりの子供でも当然の様に合格すると言われて安堵したけど、試験に落ちたら島を開放されるらしい。もちろん、トレーナーカードも貰えない。トレーナーズスクールの受験で落ちた事を思い出して、気持ちが落ち込む。

「ビー……」

私のタマゴから生まれたのは、ビートル。頭に毒針を持つむしタイプポケモンで、カントーに多く生息している。

タマゴを預かった私たちは、ボールを与えられていない。オーナーは育てろと言ったが、プレゼントするとは言っていないかった。

「ビ……」

「ほら、ポケマメよ」

「ビ……、ビツ……」

「食べないわね……」

産まれたばかりのビートルは、ポケマメを警戒してなかなか食べようとしない。

「ビ……」

「ビートル〜ご飯なのよ？」

「ビツ!？」

警戒を解くどころか、怖がらせてしまった。

怖がらせた？

「…そっか、私と同じなのね」

「ビ?」

「私も怖い事が一杯あるもの。生まれたばかりで、外に出たことも無いんだ…怖がって当然だ」

「トル…」

「外…出よつか?」

「ビー?」

それからビートルを連れて、外に出た。ビートルにとって初めて見る世界は、どう映っているのだろうか。

!

「これから、試験を開始します。番号順に入室してください」

「よし、決めるぜバルキー!」

「バツバ!」

「俺の育成は完璧だ。見ろオレのゴローン」

他の試験を受ける人たちは、思い思いの方法でポケモンを育てた様だ。私のビートルは無心になって葉っぱを食べ続け、コクーンに進化していた。流石はむしポケモンだ。

「コ」

「うん、頑張ろうね」

「次、13番」

「はい」

「いよいよ私たちの番だ。」

!?

「俺はサカキ……これでもカントーでジムリーダーをしている」

「ムサシです。よろしくお願いします」

「コ……」

ジムリーダーのサカキと言えば、カントー最強のポケモントレーナーの名前だ。ポケモンリーグで優勝を果たし、チャンピオンになろうかと言う処で辞退。その後、暫らく行方不明になっていたが帰還後、あっさりジムリーダーに収まった。

彼がジムリーダーになってから、誰も彼のジムバッジを手に入れた者はおらず。ポケモンリーグからの要請で、世界初のサブリーダーをジムに導入させた。

「試験内容は、当然ポケモンバトル。但し勝敗は、試験の結果に関与しない…ま、勝てるもんなら勝つてみるからだ」

無理です!?

「そっちはコクーンか、それなら」

「ゴオオド!!」

「なっ!?!」

「初めて見るか?こいつはボスゴドラ…気性が荒い厄介な奴だ」

白く力強いボスゴドラは、何処かオーラが出ている様にすら見える。

「コー」

「先手はそっちだ」

「クツ!?!」

勝てるわけがない。鈍足どころか不動のコクーンで、しかも攻撃した所でダメージを与えられない。

「コー!」

「コクーン…つどくばり!」

「コー!」

ポケモンの技は発想と練習によって、応用が利く。技の力を一点に貯めて威力を上げ

たり、技を組み合わせて新たな技を生み出したりと様々だ。

「！まもる」

「ゴ！」

「外した……」

「コー……」

「まさか、どくばりを飛ばしてくるとは……良い技だ」

「ビートルの時から足は遅かったですから……離れても戦える術が必要だったんです」

「次は私の番だな。ボスゴドラ、じしん！」

「ゴオラー！」

威嚇するチンビラの様な声を吐き出しながら、ボスゴドラは持ち上げた片足を地面に叩きつける。

「きゃー！」

「コ！」

地面が大きく揺れ、体が前方へと傾く。このまま倒れたら、ボスゴドラのじしんのダメージ範囲に入ってしまう。

「コー……スッピ！」

「あ……」

私の体を受け止めたのはスピアー、それはコクーンの進化した姿。

「そっか…進化したのね」

「スピ！」

スピアーはどこか誇らしげで、誇らしい。

「飛行が可能なスピアーには、じしんは通用しない…」

「スピアー！槍に毒を纏わせて、どくやり！」

「ピアーああ!?」

!?!

「あーあー、負けちゃった」

「スピ」

「頑張ったのにね」

「スピ」

「…ありがとね」

「スピ？」

「私のポケモンでもないのに一緒に戦ってくれたでしょ?」

「スッピー」

スピアーは当然だと槍を空に掲げる。

願わくば、この意地っ張りな主の為に槍を振るう騎士でありたい。

サカキ、ジムリーダーに就任する

「返すぞ…」

サカキは、ボスゴドラの入ったボールを投げて寄越す。

「これで、頼まれた仕事は終わりだな」

「ああ、試験担当官ご苦労。報酬のポイント」

「…なかなか、面白い趣向だったな」

「一人、ハズレがいたがな」

「良い意味でか？」

「まさか」

誰でも合格して当たり前の試験。意味を履き違えただけなら、合格になる。それで不合格になる様なら、論外だ。

「最後のバトルは、なかなか楽しめたがな」

「ムサシか、あれは予想以上だったな」

「しかし、ハズレが一人でも居たのは問題だな。他のチャリンコ暴走族も別途に試験を受けさせるべきか…」

「それが良いだろう」

あの手の連中は、同じ考えの奴で固まり易い。客に被害が行かない様に、試験は必要だろう。

「そう言えばさ」

「何だ？ 店長」

「お前、いつジムリーダーになった？」

「…お前が店を開けてた時だ。…報告に行ったら、店が休みだったが」

コジロウを雇った日か。

「そうか」

「まあ、お互いに夢の為に行動していた訳だ」

「よし、なら就任祝いだ」

モンスターボールを取り出す。

「む、バトルか？」

「楽しそうな処、悪いがプレゼントだ」

「デリバードか？」

「技じゃねえ！」

どこまでポケモン馬鹿なんだ。

「出て来い！」

「フーカ！」

「これはフカマル!？」

「欲しがってただろ？」

「十万…」

「フカ？」

「二十分前に生まれた新生児だ」

「つまり育成前か」

「後、これも」

「ん？指輪と石？」

「結婚祝いだ」

「!？」

そうサカキはジムリーダーになるまではと、交際していた女性との結婚を渋っていたのだ。ジムリーダーになったからには結婚するのだろうか、祝い品を渡す。裸のまま渡すのは、リア充へのやっかみだ。

「気持ちは嬉しいが…」

「どうせ来年には、子供も連れて来るんだろ？気にすんな」

「わかった…で、どうやって使うんだ？」

「指輪はネックレスにでもして、何時も付けておけ。石は…無くさずにとってればいい。その石、八百万ポイントもするからな」

「は、はアアア!？」

さて、試験の結果を通知するか。

！

「試験結果を伝える。…一名」

ざわ。

「一名の不合格者が出た」

ざわ、ざわわ。

「それは…ゴローンの育成者イチロー!」

「なっ!」

「それ以外の者は、自分のパートナーと共にゴージャスボールを受け取りに来てくれ」

「「おおー!」」

「まあ、リッチなボール!」

「あれ高い奴だよな?」

「スビ!」

合格を言い渡されたトレーナー候補たちは、目を輝かせながゴージャスボールを受け取って行く。

「ちよつと待つてくれ！なんで僕が不合格なんだ!？」

「うん?」

「僕は言われた通り、タマゴから孵ったイシツブテを育て上げ、ゴローンに進化させたんだぞー!」

「だから?」

「試験だってジムリーダーの常識外れのボスゴドラになんて、ここにいる誰も勝った奴はいないだろ!？」

試験を受けたトレーナーたちは、皆ウンウンと頷いている。

「お前、何か勘違いしてねえか?」

「は?」

「これはトレーナーを試す試験だ。ポケモンを試す試験じゃない」
「なっ!?!」

「面倒だな。一から説明してやる」

俺はそう言い放つと一段高い処に上る。

「まず、この試験の目的はお前たちとポケモンの関係を見る事だ」

「関係？」

「バツ？」

「フリー？」

「要はポケモンに懐かれているか、信頼されているか、不満を持っていないか…：そう言うのをな」

「！」

「だから最初に行つたら。生まれたばかりの子供でも出来る…：ポケモンと仲良くなるのはな」

ポケモンを原因とする傷害事件の中で、野生のポケモンに赤子を故意に傷付けられたという報告は皆無。気性の荒いバンギラスやギャラドスですらそうだ。まあ、怒りで我を忘れたり、波に巻き込まれたり事故はあるが。

「で、お前はどうかだったかと言えば…」

「お、おれは」

「ゴローンはお前の命令通りに戦つたが、うめき声以外一切の声を出さなかつた。それだけでも不自然だが、お前…：じばくを使つたな？」

「…で、でもボスゴドラが！」

「確かに格上が相手なら、必要になる事もある。今回の試験では、格上相手にどう動くか

を見るものだった」

「それなら！」

「だが！」

「っ！」

「だがそれは、ポケモンが対象だ」

「え……」

「パートナーのポケモンが、トレーナーに対してどう行動するのかを見る為だ。今回の試験ではポケモン、トレーナー双方にプレッシャーを掛けた。試験官はジムリーダー、使用ポケモンは格上のボスゴドラ。共に戦おうとする者、パートナーを案じて引こうとする者。だがゴローンは……」

「一人で逃げようと……」

「止めにお前の指示『じばく』だ。それも慣れた様子で、な。もう分かっただろ」
後でイチローは、島から追放しないとな。

「さて、不合格者が一人でも出た以上、訓練中の元チャリンコ暴走族にも試験を受けてもらうぞ」

「「うつつす！」」

ポケットモンスターロスト

皆さんは、ポケロスと言う言葉をご存じだろうか？

正式な名称に戻せば、ポケットモンスター消失系気力低下症と長い名前のアレだ。元の世界で言う処のペットロスだ。

この精神病はポケモンに愛情を注いげば注ぐほど症状が重くなる面倒な病気で、自殺者がでる事もしばしばだ。心の折り合いを付ける為にポケモン葬儀屋が出来たくらいだ。

さて、どうして気が滅入る様なポケロスの話をしたのか、それはポケパークに墓地を設置する事にしたからだ。それと言うのもこの間、100人近くの住み込みを雇い入れたのが原因だ。島での住み込みなのだから、冠婚葬祭は配慮しなくてはならない。特にポケモンに関する事なら猶更だ。

皆さんはポケモンの死に関して、意外と何も知らない。なので序に説明したいと思う。

まずポケモンは死ぬと『消滅』する。これはポケモンの体が、特殊な元素と電気物質によって構成されている為である。モンスターボールはこのポケモンの性質を利用し

て作られており、弱ったポケモンが捕獲しやすくなるのもその為だ。

こんな話を知っているだろうか？

老齡のニシノモリ教授が、オコリザルへの投薬量を誤り衰弱させてしまったという事故があった。そのオコリザルは生存本能からか、体を縮小させて教授の老眼鏡ケースの中に入り込んだ。この事故からポケモン各種が共通で持っている『衰弱時に縮小して狭いところに隠れる本能』を発見。それを活かした捕獲用ボールの開発が始まったとされる逸話である。

なおモンスターボールが開発される前は、ぼんぐりを使用していたと資料に残っている。

一応説明して於くと、モンスターボールはポケモンが快適に過ごせる様に設計されており、ボールに入る度に衰弱する訳ではない。

まあ、そんな訳でポケモンが死を迎えると『消滅』してしまうのだ。突然いなくなるポケモンにトレーナーが受ける心理的なショックはいか程だろうか。

ポケモンの中には、自分の体の一部をアイテムとして残して逝くものもある。ガラガラ、ガブリアス、ライチュウ、ラッキーなどが有名だろうか。其々、『きちょうなホネ』『りゅうのキバ』『でんきだま』『しあわせタマゴ』を残す。

全てのポケモンが形見の品を残してはくれない。

人々が心穏やかに過ごす。その為の墓であり、墓参りなのだ。カントーのシオンタウンにあるポケモンタワーがいい例だろう。

「わかったか？」

「うつつ！」

「そんな訳で、ゴーストタイプを持つポケモンの住処を兼ねた墓地と慰霊碑を建てるから、お前らソコも巡回しろよ！」

「…うつつ！」

「あ、ムサシはテレビに出ろ」

「あ、えええええ!!？」

ニヤースでニヤース！

少し用事があってカントーに上陸した所、野生のポケモンに絡まれた。それだけなら、手持ちのチート孵化、きょうせいギブスでレベル100まで育てたボスゴドラで対処可能なのだが。

「おミヤー、ポケパークのオーニヤーじゃないかニヤ？」

このニヤース、喋るのである。

「ニヤーの言葉は通じているニヤ？」

「…ああ、うん」

「良かったニヤ。せっかく言葉を覚えたのに間違ってたら、元も子もニヤいニヤ」

「そうか…」

ニヤースは唐突に自分語りを始めた。アニメと同じ様に、性格ブスに騙されたりしない。

「ニヤから、ニヤーをゲットして欲しいニヤ！」

「うん？」

「グレてやろうと思ったら、暴走族潰滅してたニヤ。やったのは近々開園するポケパー

クのオーニャーって聞いた話ニャ」

「誰がそんな話を?」

「ジュンサーが噂話してたニャ。だからニャーは、暴走族を単独で潰したオーニャーに付いて行くニャー!」

「ポケモンの通訳できる訳だし…まあ、良いか」

!

「ここがポケパークかニャー!」

「面積はソコソコ広くて、約100kmで円形をしている人工島だ。周囲を海で囲まれ、行き来は空路か海路。港にはポケパークが管理する船、カイオー丸が他の地域との橋渡しをしている」

「あの大きニャ船ニャ?」

「そうだ。島の施設も紹介するぞ」

!?

「ここは何ニャ?」

「ポケモンコロシウム…トレーナーやボスポケモンと対戦できる施設だ」

!?!

「これは…」

「ここは、ポケシアター。島で撮影した映画を上映する場所だ。映画に人気が出たら、テレビ局で島内に放送される事も有るぞ」

!?!?

「色々あつたのニヤ」

「えーつと、コロシアム、ポケシアターに化石発掘体験とレンタルショップ。おみやげ店と畑は回つたし、生活用品店『石住まい』にホテル『ムンナの吐息』、バー『ドクケイル』も紹介したな」

「あずかり屋『ガルーラの懐』も行ったニヤ」

「一応、職員の住宅地も案内するか？」

「他に何があるのニヤ？」

「レストランと墓地。後は山と普段俺がいるビクトリーショップ。…あ、カメラ屋がある」

「カメラ？」

「思い出と言えば、写真だからな」

今ある施設と言えば、こんな所だ。

「まあ、俺としては港に釣り橋を作ろうと思つてる。釣り場を作る為に海向かって、橋を掛ける釣り橋って訳だな」

「ニヤー」

「ま、お前は秘書兼俳優な」

「ニヤー!?!」

「二足歩行できるニヤース探してたんだ。子供向けの短編映画で、タイトルは『長靴をはいたニヤース』なんだけど…」

「やるニヤー!」

人手が足りなくて、テレビ局の運営はボロボロだ。今はコロシアムの対戦をライブ中継するのが精一杯だ。撮影スタッフはムサシ、コジロウ、ニヤースに任せられるが、編集の手が足りない。

反面、短編映画程度の編集な、少ない撮影スタッフと、俺の拙い編集で何とかなる。映画館で一作品も公開されていないのは、どうも見栄えが悪い。

「じゃ、ニヤースは相方二人に挨拶してきな。コジロウはあずかり屋、ムサシはコロシアムで訓練してるはずだ」

「はいニヤー!」

「?!?!」

「さて…来年には開園出来るかな?」

ポイントカードと仮ポイントカードをメニューで購入しながら、開園までの道筋を立

てていた。

「雇い入れた部下が稼いだバトルのポイントとの半分が、俺の取り分として振り込まれている。それに畑で作っている野菜やきのみは、売却でポイントになる。特にきのみは高い。バトルで使えるものは高く売れるな。…誰かがテレビを視聴しているだけで、一分一ポイントの収入は美味しい。まあ、見ている人間がポイントカードを所持している必要はあるが…問題ないだろう」

人を雇ったのは、手が足りないだけが理由ではない。

彼らはポイントを稼ぐ働き手であると同時に、ポイントを支払う固定客でもあるのだ。

「追加の試験で四人が追放…95人の住民か。まだまだ雇わねえとな」

ポケパーク資料1 10話までの施設（11話後の様子）

◆コラボ希望の方、必見◆

オレノ島

いつ作られたのか誰も知らない人工島。

島の形は円形で、約100kmの地面と周辺の海10kmがオーナーの持ち物。

人工島の為、野生のポケモンが生息していなかったが、度重なる孵化作業により野生化したポケモンが住み着いている。近海のポケモンの警戒心も解け、絶好の釣りスポットと化している。

ポケパーク

周囲を海に囲まれた人工島に作られたポケモンテーマパーク。

正式名称を『ポケットモンスターテーマパーク』と言いポケパークの愛称で呼ばれる。

入場料は500円。

ポケパーク施設

1. ポケモンコロシウム

ポケパーク内でトレーナーと対戦を楽しむ唯一の施設。

毎日の様にオーナーのポケモンが修行に訪れ、挑戦者たちをボロ雑巾に変えている。

(通称ボスポケモン)

大会参加者を募り、規定人数に達する事でポケモンバトルの大会が開かれる。

『初心』大会「Lv1～10」までのポケモンのみ使用可能。

・大会参加費500ポイント・優勝賞品5000ポイント

『中堅』大会「Lv11～30」までのポケモンのみ使用可能。

・大会参加費200ポイント・優勝賞品2万ポイント

『熟練』大会「Lv30～50」までのポケモンのみ使用可能。

・大会参加費500ポイント・優勝賞品5万ポイント

その他ポケパークからイベント大会が開かれ、優勝賞品に貴重なアイテムを入手する事が出来る。

また大会以外でも対戦相手を募集する事で、大会に関係なく対戦を楽しむことが出来る。ボスポケモンに挑む事も出来る。

2. ビクトリーショップ

ポケパーク最古の店。

ポケモンに必要とされる全ての品物が揃うとされる店で、ポケパークのオーナーが店

長をしている。その他にポケモンのタマゴが出て来るポケガチャなる物があり、世界の全てのポケモンが、この店で手に入ると噂されている。

※極稀に強力なポケモンが生まれる専用ガチャがカウンターに並んでいるらしい。

3. ラブラ港

ポケパークがあるオレノ島にある唯一の港で、オレノ島に上陸するには、この港を使用する。また自分のポケモンでポケパークに飛んでくる場合も、この港で地上に降りる。

オーナーの持ち物である大型船カイオー丸が、島の客を送迎している。

現在は釣り橋を建築している。

4. ホテル『ムンナの吐息』

心地よい眠りを信条にするポケパークのホテル施設。パーク内で複数の『ムンナの吐息』が散見される。

ホテルの宿泊料は、5ポイント。

5. ポケシアター

ポケパーク内で撮影された映画を楽しむ事が出来る施設。

『長靴をはいたニャース』を皮切りに『ダーテングの神隠し』や『孤高の騎士スピアア』など多くの名作を生みだし、上映している。

新作公開された『ロケット団 危機一髪!』は大ヒットを記録し、ポケウツドに大打撃を与えた。

6. オレノ島テレビ局

オレノ島で放送されている全ての番組を放映している施設。

現在のスタッフはムサシ、コジロウ、ニヤースのトリオチームが奮闘しているものの、少ない人員で回している様だ。ポケモンコロシアムのバトルを生放送として延々と流れている他、それ行け!ロケット団!シリーズが放送され、子供の心を掴んで離さない。

7. あずかり屋『ガルーラの懐』

ポケモンの託児所施設。運営はコジロウに一任されており、複数のポケモンが暮らしている。

責任者のコジロウが多忙である為、コジロウの手持ちポケモンであるダーテングが面倒を見る事が多い。

トレーナーの利用は認められていない。

8. バー『ドクケイル』

ポケパークで唯一お酒を楽しめるお店。店の名前は、マスターが酒毒の言葉から名付けた。

豊富な種類の酒を扱っており、カクテルも楽しめる。

料金こそ高目だが、ゆっくりとした大人の時間を楽しめる。

9. 生活料品店『石住まい』

オレノ島で生活する従業員の為に作られた施設。

少ないポイントで多くの物が買える多売薄利がたの店。店員には女性が多く、洋服の購入も出来る事が原因だとの噂である。

島の住民の為に生活を支える大事な店だけあり、店の大きさはポケモンコロシウムに次いで、島内二番目に大きい施設だ。

10. カガヤキタウン

島の職員が暮らす為に作られた町。生活料品店『石住まい』もここにある。

町の家は全てオーナーの持ち物で、賃貸契約を交わしているが家賃は取っていない様だ。それどころか、相応のポイントを支払えば、借りている家をそのまま購入できるらしい。

土地こそオーナーの名義のままだが、購入時の契約で購入者が住んでいる間は、家建て替える様な好き勝手は出来ない様だ。むしろ土地を売りたい所、人工島の配管などの関係で売ることが出来ないのとか。

一家に一台、ポイント消費する事で使える回復装置が設置されている。

11. レストラン『ワタッコ』

オレノ島各地で経営されているチェーン店。

島で取れた野菜やきのみをメインに料理を振る舞う。

海が近いカツオやマグロなど大型の魚でも、新鮮なまま食べられる。

肉料理は、素材を別の地方から取り寄せる必要があるのが高い。

一人一食で、凡そ20ポイント程とお手頃。

12. 共同墓地

死者と生者の交わる場所。

この場所については、多くを語るまい。

ゴーストタイプのポケモンが集まる。

13. カメラ屋『スナツプ』

カメラの購入やフィルムの現像をする専門店。

直ぐに現像したい写真やフィルムが切れた時に重宝する。

14. レンタルショップ『田中』

必要だけど買いたくないを叶えてくれるレンタルショップ。

カメラを忘れた観光客が、専門店で購入よりはと借りて行く。結局カメラ屋で現像して貰う事に成るので、カメラ屋には行く事になる。

広い島を探索するのに徒歩は大変と、自転車を貸してくれるので案外繁盛している。

古代の山

島に一つだけある標高2000m級の山。

孵化した古代ポケモン達の住処となっており、山頂には薄っすら雪が残っている。なぜ古代ポケモン達が、この山に集まるのかウツギ博士が研究しているらしい。

古代の山施設

1. 山荘『ゴローン』

ツアーや山登りに訪れる者達の憩いの場。

山の天気は変わりやすいので、宿があるのは大変ありがたい。

一泊、25ポイント

2. 化石発掘体験施設『でいぐ』

ポケモンの化石が埋められた土の中から、自分で発掘する体験コーナー。山荘『ゴローン』と隣接して建てられており、子供の笑顔で溢れる現場となっている。

夕方には閉まってしまうので、山荘『ゴローン』で宿を取るのが良いだろう。

3. 山男育成施設『ビシバシ』

いつの間にか出来ていたオーナー非公認の山男育成施設。

山の麓にある森を不法占拠しており、施設内で何が行われているのか不明な怪しい施

設。

だが中に入る人は多様でも、出てくる人間の服装は全て山男その物で、警備隊と何度も交戦している。

ある日、オーナーが訪れた日を境に警備隊との交戦もばつたりと無くなる。

オーナーに聞いた所「世の中、知らない方が良い事もあるよな…うん」と遠い目をして語っていた。

タイプ一致なんだなあ…ハルオ

ポケパークの開園から、一年が経過した。

分かり易く言うとかサカキの子供が、今2歳だ。結婚前から妊娠していたそうで、フカマルを渡してから直ぐに出産の連絡が来た。こういう時の祝い品は子供用具だろうと、カビゴンのぬいぐるみを送ってやった。

しかし、俺が思っていた以上にポケモンとは人気がある生物らしい。開園二週間で来園数が一万人を超えた。念の為にコジロウの両親から、人手を借りていて助かった。

客の要望やらクレームを聞いている内にアイデアが湧き、新しい建物も増えたのでよしとする。

クレームと言えば、時折ギャンブラーが島に来る事がある。彼らは、賭場がない賭場がないと呟きながら、バーで酒を煽って帰って行くのだ。この話を聞いた俺は「よし、カジノ建てよう」と決意した。

そう言えばサカキの子供が生まれた頃、ポケモン学会で不自然な現象が話題になった。世界各地のポケモン博士の家や近所で、出産ラツシュに見舞われたのだ。しかも、生まれた子供の名前に共通点があり、色や宝石の名前が付けられているのだとか…ポケ

スベ始まった？

まあ、不思議な現象ならオレノ島も負けていない。

ポケパークが開園し、記念すべき最初の客。…それが異世界人だったのだ。

何か時空の歪みから変な服の奴が来たと思っただら、異世界人だと自分で言うのだから頭の心配をしたものだ。本人たちはメガロポリスの住人だと言うので、ああウルトラマンかとスルーを執行した。

異世界人を普通の客として扱ったのが悪かったのだろうか？

パラレルワールドからも客が来るようになった。おい、パルキアにディアルガ。お前らが開けた時空間の穴直しとけよ…絶対にギラティナに頼んで、穴を安定させるんじゃないぞ…絶対だぞ？

「どうしたコジロウ？」

「いやあ、あずかり屋に手が回らなくて…」

「ん？」

「もう皆、元氣いっぱいなのは良いんですが…」

「あそこは生まれて間もないポケモンを保護するだけで、育てなくても良いんだぞ？」

「え？」

「ガチャ引いて、ハズレだと思ったら捨てて行くトレーナーがいるだろうなあと思って

作った施設だから。ある程度レベルが上がったら、野生に返してるだろ？」

「ええー、皆ずつといますけど!？」

「お前が構いすぎるから懐いたんだろ…ゲットしてやれば？」

「いいんですか？」

「おう、コジロウもダーテングだけだと厳しいだろうしな…どいつが残っているんだ？」

「えーつとマダツボミ、キモリ、モクロー、タマタマ、クルミル…」

「…草タイプエ」

「ハッ！…そう言えば……」

「やはり存在するのもかもしれないな…トレーナーにもタイプが」

発見例は少ないが、偏ったタイプのポケモンに好かれる体質の人間がいる。ポケモンジムを最初に作った男もこの体質だったとされ、そのポケモンのタイプに合わせた修練施設として誕生したのが最初のポケモンジムだ。

差し詰めコジロウは、草タイプなのだろう。

「そう言えば…ムサシは毒タイプのポケモンに好かれているのかも…。この間、ハブネークに甘噛みされました」

「それは攻撃じゃないのか？」

「これでコジロウの仕事も一つ楽になるだろう。」

「あれ？オーナーは何タイプなんです？」

「俺？…強いて言うならモンスタータイプ？」

「何ですか、それ？」

「あー俺の手持ちってボスゴドラ、バンギラス、ギャラドス、ガブリアス、ゲンガー、リザードンなんだよ」

「うへえ、強そうなのばかり…ん？」

「いかにもモンスタータイプのが集まる」

「全部顔が怖いポケモンですもんね…」

「俺の事は良いから、仕事に戻れ。この後、ロケット団シリーズの撮影だろう」

「あ、そうでした！ジムリーダーのサカキさんがゲスト出演するんですよ！ロケット団のボス役なんですけど、嵌り役で！」

「わかったわかった。楽しんで来い」

「はい！失礼します！」

コジロウの背中を見送ると直ぐに電話を掛ける。

「ご注文のハウオウ用意出来ました…ええ、高いですよ。10億円つてところですよ、下取りにタマゴですか…数は？」

「……、……」

「ほー、集めましたねえ。良いでしょう…3億引いて、7億どうでしょう？」
「…！」

「それなら定期的にタマゴ卸して貰えば…ええ。それで分割払い」

「…、…！」

「はい。タマゴでのお支払いでも構いませんよ。多く集まれば、分割払いの超過分も引かせてもらいますよ。はい、では契約成立という事で…」

「…分かつているだろうが」

「顧客情報を漏らしたりはしませんよ…支払いが滞らない限りは…ね」

マグマ団VSアクア団

随分昔の記憶なので、存在そのものを忘れていた奴らがいる。

そう、ポケモンお馴染みの悪の組織である。

サカキがロケット団を作りそうもない現状で、平和な世界が続いていくのかと言えば
そうでもない様だ。

マグマ団。人間が暮らせる大地を増やそうとする悪の組織である。まあ、日本の人口
密度を考えれば、いたって普通な思考回路だ。

それに対抗する勢力がアクア団だ。奴らはポケモンの誕生する海を広げて、新種の水
ポケモンを生み出そうとしている頭の可笑しな奴らだ。ポケモンの理想世界を作ると
喚んでいるが、間違いなくヒトカゲ族は絶滅である。

さて、この両団。いつの間にかオレノ島に上陸を果たし、面倒事を起こしている。

マグマ団のボスであるマツブサは、人工島を見て歓喜。俺をマグマ団の幹部として迎
えようとあの手この手で勧誘してくる。

アクア団は逆に島を潰そうと、定期的に手下を送り込んで来る。

その両者が、ポケパークで出会おうものなら路上バトルである。厄介な事にマグマ団

はポケパークを守ろうとしていて、アクア団が潰そうとしている。これだけならマグマ団と協力して事態の鎮圧にあたれば良いのだが、そうするとマグマ団の一員として世界各国に手配されかねないのだ。

ポケウッドやポケモンセンターの設置を断ったツケが回って来たのである。

「どうしたものか…」

「両方と戦う訳には行きませんか？」

「それだと定期的に二つの団から攻撃を受ける事になるぞ？」

「うーん」

「奴らのアジトを潰すとか…」

「組織壊滅？……ダメだな。国際警察が危険団体として処罰する口実になる」

「他の誰かが潰してくれればいいんですが…」

主人公たちが活躍したとして、旅に出るまであと8年と少し、時間稼ぎが必要だろう。

「利用客からもクレームが入っていますし、手を打たないと」

「分かっている…がなあ」

そう言えば奴ら、キーストーンを持っている。何所で手に入れたのか不明だが、利用できるかも知れない。

「ちよつと一人にしてくれ…」

「……………わかりました。失礼します」

キーストーンがあるなら、メガシンカだ。奴らは錠前を開ける鍵を手に入れたが、施錠されている箱の方はどうだろうか？

水と火のメガシンカ石。

いや待て、それよりも彼らに相応しいアイテムがある。

『べにいろのたま』と『あいいろのたま』…この二つを上手く使えば、ポケパークへの興味を逸らせるのでは？」

奴らが求めるグラードンとカイオーガの強化アイテム。興味を持たないはずがない。

「試してみるか…」

翌日から其々噂を聞きつけたマグマ団とアクア団が、ビクトリーシヨップに押しかけて来た。

「おい、店主！カイオーガをパワーアップさせる道具があるってホントか!？」

「まてまて、グラードンのパワーアップアイテムが先だ」

「…ああ、聞いた事はある」

「この店では扱っておらんのか!？」

「どうなんでえ!」

「レプリカならあるぞ」

「レプリカア!？」

「売りに来る客がいても、ピンポイントにしか使えない物は買い取らんしな? まあ、出来上がったのは、古代ポケモンの強化アイテムだったが」

前世で誰かが言っていた。嘘を語る時は、七割の真実を混ぜると。

「それで売りに来た奴ってのは!？」

「確か…売れないなら元の場所に返してくるっと言っていたが」

「元の場所?」

「ど、どこでい!？」

「詳しい事は知らんが、ハウエン地方(ルビー、サファイアの舞台)の何所かだと言ってたな」

俺がそう言うのとドタドタと慌ただしく店を出て行った。

「一件落着だな」

「ビィ〜ビィ」

ポケモンコロシウム『初心』大会

「さあ、始まりました。ポケモンコロシウム『初心』の部。実況は私、コジロウと？」
「解説のサカキだ」

「さあて、選手たちの入場であります！」

久し振りにコロシウムに足を運ぶと『初心』大会が開かれていた。

ポケモンバトルを見るのも一年ぶりの事もあって、ちよつとワクワクしている。

「ふむ。今回はルーキーが集まった様だな」

「確かにコロシウムでは見かけない顔が、ズラーッと並んでおります」

「恐らく其々の地方に住むトレーナー未満の者達だろう」

「未満ですが？」

「正確には、トレーナーカードを持っていないだがな。この島ほどトレーナー修行に向いた場所もあるまい」

ポケモンのタマゴも安価で手に入り、初心者向けのコロシウムもある。それだけでは飽き足らず、ビクトリーシヨップでは進化の石や技マシンも取り扱っている。その他、ポケモンの食事であるポケモンフーズ、ポケマメ、ポロックなど多数の食料を作る講習

会すらある。

ポケモントレーナーはバトルが出来るだけでは務まらないのだ。

「おっと第一試合の準備が整ったようです」

「両ポケモン共、奮戦を期待する」

「さあ第一試合。赤コーナーから、ユキ選手！」

「…お、落ち着いて…私」

ユキは初めての大会で、オドオドしている様だ。

「続いて青コーナー。バイト…うおほん、ヴァイト選手！」

「ふ、俺のポケモンが火を噴くぜ！」

なかなか個性際立つ二人の対戦だ。

「さあてバトルが始まる前にルールのおさらいだあ！」

「互いに使用ポケモンは三体、道具の使用は禁止。使用するポケモンのレベルは最大で10までだ。この大会では闘い慣れていない新生ポケモンの育成が目的の為、持ち物の装備も禁止だ」

「サカキさん、大会途中でレベルが上がってしまったら？」

「無論、続行だ。育成が目的なのだレベルは上がろう」

「但し！忘れちゃいけないこのルール！」

「二試合中にポケモンの入れ替えが出来るのは、二回までだ。これは入れ替え技も含まれる」

「とんぼがえりとかですね」

好相性を狙つての入れ替え合戦は見るに堪えないからな。

「おっとユキ選手、ヤミカラスを出したー!」

「対するヴァイトは、ニヤルマーか」

あく／＼ひこう対ノーマルか。低レベル同士だと、どうしても相性の優劣で決しやすい。

「ニヤルマー! ひっかく!」

「マー!」

「避けて、つつく!」

「ヤー、ヤー!」

初手は互いにタイプ一致技を選択。生まれたての彼等には火力が足りないのだから、良い判断だろう。

「チツねこだまし!」

「ニヤ!」

「ああ、ヤミカラス!」

ヤミカラスにニヤルマーのねこでましたが、クリーンヒットした。つつくをしようとのめりになった所を上手く狙ったな。

「止めだ！ひっかく！」

「マー！」

「よ、よし！ヤミカラス、ゴッドバードで返り討ちだよ！」

「ヤー！」

ゴッドバード、それはひこうタイプの極致の一つ。あなをほるの様な為が必要となる業だが、ニヤルマーのねこだまして怯んだフリをしてやり過ぎたようだ。ねこだまし、お前が騙されてどうするよ。

「さあ、ヤミカラスの華麗なカウンターによって、ニヤルマーがダウン！」

「あれはタマゴ技だな。親のポケモンが余程優秀なのだろう」

「続いてヴァイト選手の二体目は？」

先に一体落とされたのは痛い、まだまだ試合は分からない。

「次はお前だ！ブルー！」

「ブル？」

「あ、あわわ！」

「ヤ、ヤミ……」

ブルーの特性はいかくか、ゴッドボードは物理技だしステータスを下げに来たか？

「戻れブルー！」

「あ、あれ？」

なるほど、いかくを使い回すつもりなのか。

「出番だ！カメテテ」

「テー？」

「うわ、何それ」

「ヤミー！」

お、ヤミカラスはトレーナーの指示を聞かずにゴッドボードの待機に回ってるな。実に優秀な奴だ。

「みだれひっかき！」

「テテ、テテ、テテ、テテ！」

「あ、ヤミカラス!？」

「ヤミー！」

みだれひっかきにゴッドボードで特攻。自分の残り体力が僅かなのを知った上での事だろう。アイツ戦闘のセンスもあるのかよ。

「大分…持っていかれたか」

「ありがとう。ヤミカラス…」

「サカキさん。これでお互いに手持ちは二体ずつですね」

「うむ、予想より遥かに見ごたえのある勝負だ。しかし、ヤミカラスを失ったユキ選手にどこまでの力が残っているのか」

「あの実力。間違いなくエースでしょう」

「とは言えヴァイト選手の手持ちは全て公開された。情報戦ではユキ選手が有利だ」

さて、彼女の手持ちは何が残っているのか。

「おねがい！タツベイ！」

「ベイ！」

「タツベイだと…!?!」

ドラゴンポケモンは低レベル帯では弱いとされる。まあ、普通に例外がいる訳だが、多くのドラゴンは最終進化形態になって初めて、その強大な力を解放出来る様になる。

「タツベイ、りゅうのいかり！」

「ベイ！」

「っしま…!?!」

りゅうのいかりを真面に受けたカメテテは、そのままダウン。タツベイは勝利を手にした。

「ツブブルー！」

「ブル！」

「もう、いかく…」

「ベイ…っ」

ユキとしては、三体目のポケモンの種類は伏せたい所だろう。タツベイの体力は満タ
ンだし、上手く戦えればそのまま勝利するのも不可能ではない。

「でも、りゅうのいかり！」

「ベイ！」

「こおりのキバ！」

りゅうのいかりは、ダメージを安定して稼げる技だ。パツと見た感じ炎に見えるか
ら、少しでもダメージを軽減しようところおりのキバを選択したのだろうが、回避を捨て
たのは痛い。

「今、かみつくよ！」

「ベ—イ！」

「ブル!!」

「ア—！」

りゅうのいかりは、視界を塞ぐと共にブルーの足止めを成功させている。その足止め

は、かみつくに終着する。

「おおーっと、ブルーダウン！」

「狼狽えていたとは思えない程、堂々とした戦いだっただけだ」

「ふー」

「ベイー！」

第一試合は、ユキの勝利となった。

だがこれはポケモンコロシウム『初心』大会の第一試合でしかない。これほどの激戦が初心者戦の戦いだということのだから、この世界のポケモンバトルがどれだけ難しいのかを改めて実感する事になった。

ミステリーの香り

ポケモンコロシウムでの大会が終わり、店長がゆったりと休憩を取るビクトリーシヨップ休憩室に、大会の余韻を霧散させる機械音が鳴り響く。

「はい、もしもし」

「もしもし、私はヒトモシミステリーという劇団の団長をしておりますミリアドと申します」

「はあ、ミリアドさん…」

「と言つても、ようやく一人前に舞台上に上がれるようになったばかりの小さい劇団なんです…」

「それで、私にどんなご用件で？」

「ああ、はい。実は最近になって、ポケパークがテレビなどで大きく取り上げられているのを見まして、劇団員といつかこんなにも多くの人の前で舞台を打ちたいと！」

「？」

「それでダメ元でポケパークさんの舞台で、公演のお願いをとお電話をした次第です」
知名度が上がるのは有り難い事だが、テレビの取材を受けた事など無い。そして舞台

も何もうちにはステージが存在しない。

コロシアムで代用できたから、優先度が低かったんだよな。

「あの…」

「ああ、突然の申し出で驚いてしまつて…あの今、ポケパークには舞台と呼べる物は設置されておりません。なので何か誤解をなさっているのでは？」

「あれ？…でも今『初心』大会で、博麗霊夢さんが優勝を…」

隠し撮りかな？

「あれはポケモンバトルをする場所です」

「そうなんですか……」

このまま断る事も出来るが、何だか勿体ないような気もする。設置自体はポイント消費で賄える訳だし、元の世界ほど維持するのは難しい事じゃない。

「参考までに、今までどんな舞台を？」

「えつと…私たちは旅一座なので、トラックを改造した携帯型の舞台ですとか、町ではジムをお借りする事が多いですね。ジム戦を見学する人の為に二階に観戦用のイスが設置されていたり……」

「ああ、いえ舞台そのものではなく、公演した舞台の内容を教えて頂ければ」

「あつああ、す、すいません！」

電話で大きな声を出すは止めて欲しい。耳が痛い。

「ええつとですね。コホン。我がヒトモシミステリーは名前の通り、ゴーストポケモンのヒトモシを主役に添えたミステリー物の舞台を提供しております。ヒトモシの妖しくも魅惑的な炎とミステリアスな世界観から高評価を頂いております」

そう言えば前の世界で、ポケモンの探偵ゲーがあつたな。

シャーロックホームズに変換して考えてみるとなかなかそそられる。スモッグの霧にかくれた道を彩るレンガ模様。その霧の中で揺らめくヒトモシの妖しく光る紫色の火。

「…良い」

「子ども達には余り人気ではないのですが、そもそも夜に映える演目でして」

「よし、気に入った！」

「えっあの？」

「急いでステージの用意をしよう。今から建築を始めるとして…そうだな一カ月は欲しい。舞台合わせの稽古と関連グッズを作るとしてもう一ヶ月…二カ月って所か…」

「あの、オーナーさん？」

「ああ、ミリアドさん。契約書は使い者を出すので詳しい説明はそちらで確認してください。これから忙しくなりますよお！」

「あの…事態が読めないんですけど!」

おっと、いけない。テンションが上がるあまり、説明を疎かにしてしまった。「すいません。舞い上がってしまつて」

「はあ…」

「まず先程のお話ですが、現在ポケパークには舞台と呼べる物はありません」

「…はい」

「本来ならお断りする所なのですが、お話を聞いて考えを改めました。あなた方、ヒトモシミステリーの皆さんの為に新しく舞台を作られていただきます」

「は?」

「舞台装置は奈落、各種照明装置、スモーク発生装置として、他の用途にも使えるよう防音、防火を徹底し…」

「ええええええ!?!」

!

話を纏めて直ぐに時計を確認すると慌てて一方を入れる。

「博麗霊夢を逮捕しろ」

純白のフルール・ド・リス

博麗霊夢を逮捕してから、観客が増えたと話題のポケモンコロシウム。

カメラを持っていなかったのに逮捕されたのには、訳がある。それは彼女(?)の体を見て貰えれば察しが付くだろう。そう四角四角しているのである。

私は思った。あ、霊夢スキンだっと。

どうも調べてみると彼女は、マインクラフト新ポケモンMODの世界からやって来たマインクラフターである事が判明した。マイクラのMODの中には撮影カメラを設置する物もあるので、それを使って放送していたものと推測される。

「つまりゆっくり実況界からの使者か」

実況自体は生放送だとして、お茶の間に電波が届けられた理由は不明だ。実害もどころか利益を生み出したので、博麗霊夢は無罪放免となった。

その所為かは不明だが、ポケパークの住人に饅頭が増えたという。

！

「協力を依頼したい」

自分の目の前で頭を下げる赤髪の青年。

「協力…ですか」

「私のラボでは研究を続けていますが、何分古代文明の代物。破損している物も多く、解説はラボの専門ではありません」

皆さん大好きフラダリ所長である。

なんでもこのフラダリさんは、古代文明の碑石を発見。碑石に刻まれている古代語の解説を依頼しにやって来た。

「古代語ですか…」

「ええ」

古代語。ポケモンを隣人として、人々が生活していたとされる古代期に用いられた文字を指す。ポケモン史を紐解けば、信じられない様な事実が沢山出て来る。ディアルガやパールキアの世界創造新話から始まり、果てはウルトラホールからやって来た人類まで正気を疑うレベルだ。

フラダリさんが発見した古代の碑石は、約3000年前の代物である事から、カロス王の最終兵器に関する伝承か何かが刻まれているのだろう。

「どうして私に？」

「ポケパークには、優秀な科学者や研究者が入り浸っていると噂を聞きました。それに…」

「それに?」

「私と同じような活動をされている事も、数ある候補の中から選出した理由の一つです」
うちには研究所はないが、オーキドを始め研究者との橋渡しを頼むなら申し分ない。
同じような活動というのは、フラダリが行っている経済的貧困者への支援活動の事だろう。似たような活動と言うと、チャリンコ暴走族の雇用から始まる人材雇用が当て嵌まる。

いくら雇っても人手不足が解消されない当パーク。原因は次から次に新しい施設を建設させる自分にあるのだが、経済がポイントで回っているので損害は出ない。まあ、俺が倒れたら全部崩壊するシステムなので、早く手を打たないとマズイ事になる。

「しかし、考古学の分野でしょう?」

「はい、ですが調べて見た限り考古学という分野が存在するものの。考古学者自体が驚くほど少ないのです」

これは俺も考えた事がある。

俺が覚えている限り、考古学者としてポケモンに登場しているのは二人だけ。アロエとシロナだけである。しかもシロナはまだ10代のロリッ子であるからして、現実的にはアロエ一択だ。

「確かに…私も心当たりがあります」

「まるで古代について調べる物を排除する者がいるのかと疑うほどです」

「ふむ…」

そう考えるとゲーチスってどうやって古代の伝承を調べたのだろう。

二人の英雄は語り継がれている物だから知っていてもおかしくは無いが、ポケモンが石になっているとか推測できる情報をどこから掴んだのだろうか。仮に伝承で伝わっていたとしても、いい大人が信じるだけの説得力があっただろうか。

七賢者の誰かが考古学者だったとも考えられるが。

「それで研究協力の件ですが…」

「ポケパークは娯楽施設に過ぎません。研究をするのも客受けに関する物ぐらいです」

「しかし、貴方は古代語を読み解くことが出来る」

「っ！」

システムメニューからの購入枠に言語に関係するものが有った。

転生当初。ポケモンと言えばゲームだった俺は、海外版の英語表記読めたら良いなあ
と深く考えず全言語を購入（習得）した。その中であつた言語の一つが、古代ポケモン
語や超古代言語だ。

「…その反応、推測でしかありませんでしたが、どうやら正解の様だ」

「推測ですか…」

「古代史に於いて人とポケモンが隣人として暮らしていた頃、人以上の知性を持つポケモンも多くいたとする論文があります。そのポケモン達が人間に文字を与えたとの推察もありましたが、問題はそこではありません」

フラダリが一人で苦悩した本当の理由は、頭が良すぎて周りが付いてこられなかったからなのではと脳裏に過る。

「このポケパークで度々目撃される伝説のポケモン達。その中にはディアルガ、パルキアそしてギラティナの姿が確認されている。論文に書かれていた高い知性を持つポケモンの特徴と一致するポケモンが！」

「伝説のポケモンか……」

カマかけに引っ掛かったという訳か。

「化石ポケモン達の為に住居を提供しているのも関心の現れ」

勝手に住み着いただけなんだが。

「分かった。協力しよう」

「これが発見された碑石の写真だ」

「これは慰霊碑の様だな……あしきひ いのちを すいあげ しのはな ・い・る かみ：
 みだ・し あらたな ・・・せ かいを ・ むよわ きこころ もつおう ふたつ
 の こことは ・ のこ ・ たみへと いのりを」

何を表しているのか、気になるのは書かれている文字を意図的に削り取った様に見える。

「悪しき日、命を吸い上げる死の花…ふむ」

「これ以上のお手伝いは出来そうにありませんね」

「他にも古代文字が刻まれた遺物は残されていますが…」

フラダリが取り出した一枚の写真を受け取り、凝視する。

あ、最終兵器の設計図だ。

これは教えたら俺がバットエンドを迎える羽目になるぞ。主人公に潰されてしまう。

「うん？」

「どうされました？」

「良く分からない事が書いてある。三つの体に二つの心、終わりを告げる三体の使徒」

花の様な形の図形の上に書かれているこの文章。何だか違和感を感じる。

「これを」

「これは？」

「この石板の裏側です」

「先に出して欲しかった。…花は二つの顔を持つ。何なんだ…」

ゲームに語られない別のストーリーがあるのだろうか？

「……………カロス王……」

「何か？」

「ああ、いえ。大変参考になりました。私はこれで失礼いたします」

「そう、ですか？」

「協力のお礼ですが後日、部下に運ばせて頂きます」

フラダリ。XYの悪の組織フレア団の首領であり、サカキに次いで二人目の健全な精神を持つ首領。まともな精神を持つからこそ凶行に走らずにはいられなかった哀れな男。

死なせるには惜しいな。

サカキ様 ロケット団を立ち上げるってよ

ジムリーダーサカキ。世界最強のジムリーダーとして語られる伝説の男は、今苦境に立たされていた。

「あなた……」

「シルバー……っ」

息子であるシルバー三歳が行方不明になったのだ。

「シルバーにはフカマルが付いているはずだ……生きてはいると思うが」

シルバー少年が行方不明になったのは、家の近くにある公園での事だった。まだ生まれて間もないフカマルをシルバーの最初のポケモンとして託したのだ。

このフカマルは結婚祝いに店長から受け取ったフカマルが成長、進化したガブリアスの子供である。

「寧ろフカマルの方が心配ね……りゅうせいぐん」

「あ、ああ。まだコントロールできていない」

りゅうせいぐん。特別な技で最高レベルに懐いていなければ習得できない教え技である。果たして誰が教えるのか、決まっている使えるポケモンが教えるのだ。フカマル

の親であるガブリアスは、修行の末身に付けた技を惜しげも無く伝授した。それはもう、いつかこれを超える技を身に付けろと言わんばかりに。

「そのあたり一帯が潰滅しなければいいけど…」

しかし技の習得は成った。

だがフカマルもトレーナーであるシルバーも子供なのである。これは子供に残弾無限のロケットランチャーを持たせるようなものであり、癩癩を起したフカマルは、簡単に街一つ位破壊して見せるだろう。

「探さねば…」

「人手…いるわね」

こうして行方不明の息子シルバーを搜索するべくロケット団が結成されたのである。

なおロケット団のネーミングは子供受けを狙ったものであり、少しでも子供の気を引くために付けられた。ポケパークの人気シリーズが影響したのは間違い様がない。

「店長に協力を仰ぐか…」

「息子が行方不明？」

唐突に何を言い出すのかこのサカキ様は。

「手を貸してもらいたい…」

「いや、こっちも新人の手配とか忙しい…」

「手がかりはある」

「おーい」

手がかりって言われても、島から出る気は無いんだが。

「どうも巨大な鳥ポケモンに攫われたようだ」

「ん？」

鳥…ブルー？

「現場には珍しい『にじいろのはね』が見つかった事から、ホウオウの可能性が高い」

「ホウ…オウ？」

何年か前にホウオウが欲しいと連絡が来た事があつた様な。

「うむ、ホウオウと言えばジョウトだが、問題のホウオウが野生のポケモンとは考えずらい」

「子供には甘いからなあ、ポケモンは」

そうなると息子搜索は手近なカントーから虱潰しに探す…あ、ロケット団だこれ。

「それで搜索隊を編成したい。力を貸してくれ」

「お、おう。わかった」

サカキ様が頭を下げていらつしやる。もし攫つたホウオウが、俺の売り払つた中古の

ホウオウだったらどうしよう。

「それならムサシ、コジロウ、ニヤースを連れていけ」

もうこうなったら、面白そうな所に突き進むしかない。

アニポケメンバーは押し込んでおこう。

「良いのか？あの二人はお前の右腕だろう？」

ムサシ、コジロウはアニポケ開始当初ロケット団のエリートだったただけあって、並のジムリーダーより強い。アニメでやられやくとして定着したのが間違いな程の腕前なのだ。恐らく資金不足からロクに食事も出来ず、体力や思考力が低下した結果だろう。

「痛いちゃ痛いけど、二人がいなくても運営は出来る。テレビ局員もラジオも人手は足りている。まあ、ロケット団シリーズはそろそろネタ切れだしな」

「ロケット団、ロケット団か」

しかし、時間が経つのは早いものだ。ついこの間ビクトリーショップを開店させたと思っていたら、あれから二年と少し。

サカキの息子、シルバー。ポケスぺのゴールドのライバルで、転生特典であるあのゴールドさんが、背中を追いかけたコソ泥である。しかし、人探してロケット団を立ち上げたとして、何故ミュウツーの開発などと言う話になったのかは謎だ。

「ふむ、ロケット団ならシルバーもテレビで見っていたな。……よし、シルバー捜索隊は

『ロケット団』と名乗る事にしよう」

「まあ、好きにしてくれ」

「ジムは暫らくサブリーダーに任せればよからう」

「強すぎるのも問題だな。ポケモンリーグには連絡しておけよ」

「ああ」

目的が完全にクリーンな組織だが、初代悪の組織ロケット団が誕生した。

「俺の息子だ。直ぐにくたばる事は無いだろうが…」

「心配事か？」

「ホウオウという伝説が相手だからな。最低でも伝説を倒せる戦力が必要だ」

「メガシンカでは足りないか？」

「分からん。だが余力を持って当たりたい事件だ」

子供の命がかかっている訳だし、失敗できないと慎重になるのは仕方ないか。

「ところで新人の手配と言っていたが、そっちも何かあったのか？」

「ああ、カジノ運営に必要な人員だ。全部がスロットなら店番だけでもいいんだけどな」

折角のカジノなのだから、ゲームの数が少ないのは寂しい。スロット、ポーカー、ルーレットは定番としても、ポケモンコロシウムで勝敗を対象に賭博する案や、完成した釣り橋を利用した釣り大会を対象に釣果を当てさせたりするイベント形式も考えている。

「スロットか…」

「あれは運営が必ず得をするようになってるから、暇潰しにやるもんだぞ」

「ああ、そうだな」

サカキはロケット団の結成から、手持ちのポケモンをガラリと変えた。と言ってもひこうタイプに有利なゴローニャは続投であったが。